

平成 22 年 6 月 11 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2009

課題番号：20720118

研究課題名（和文） 副詞的修飾における意味強制に関する記述的研究

研究課題名（英文） A Descriptive Study of Semantic Coercion in Japanese Adverbial Modification

研究代表者

井本 亮（IMOTO Ryo）

福島大学・経済経営学類・准教授

研究者番号：20361280

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語の副詞的修飾関係によって生じる意味強制の現象を記述し、動詞述語文における意味計算のメカニズムを明らかにしようとするものである。本研究では特に複合動詞句「Vすぎる」、結果構文を中心に分析した。そして、副詞的修飾関係が修飾限定の基本原則をもとに意味的整合を図り、要素間の意味的衝突が生じる場合には、文の構成要素にはない意味を導入することによって意味的不整合を回避するプロセスを有することを論証した。これにより、副次的・付随的とされてきた副詞的修飾によって文の意味解釈の更新が起こることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research was to explore linguistic phenomena of semantic coercions involved with adverbial modifying relations, and to clarify the mechanism of semantic computation in VP. In this research, two specific constructions were concentrated on: Japanese VV-compound “V-sugiru” (over-V) and Japanese resultative constructions. As a result, I exemplified the facts that adverbial modifying relations introduce a mechanism of semantic coercion for preventing the sentences from being ungrammatical. When there is a semantic incompatibility between a modifier and the modified constituents, a new compatible interpretation is installed without any morphological supplements. What causes this interpretation is a semantic incompatibility in the modifying relation, not the syntax. This research has proven the importance of arguing the semantic computational mechanism of adverbial relations that previous literatures have regarded as arbitrary or trivial elements in sentences. The conclusion of this study implies that our perspective of study of adverbs should be shifted from a static classification to a dynamic system of interpretation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：現代日本語文法、副詞的修飾関係、結果構文

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：副詞的修飾、情態修飾、強制、結果構文、「Vすぎる」、概念意味論

1. 研究開始当初の背景

情態副詞については多様な用例の収集とその網羅的記述として研究成果が蓄積されてきた。「帽子を軽く叩く」のような動作様態を表す副詞と「帽子を軽く作る」(作られた帽子の重さが軽い)のような結果状態を表す副詞が見出され、様態副詞/結果副詞の対立として、先行研究も長くこれを継承してきた。

しかし、この様態副詞/結果副詞という2項対立は2種類の異なる対立を内包させている。被修飾成分である動詞句のアスペクト的性質(進行相/結果相)と修飾対象の意味概念(ウゴキのサマ/モノのサマ)である。もちろん両者は全く別の概念である。これが原因となって、一般的に見られる現象を正しく位置づけることができない。たとえば「ライトが顔を赤く照らした」のような、動作継続中のみ実現するモノのサマ(色)を表す事例や、「太郎が5km走った」のような、走り終わって初めて確定する数量を表す事例は様態/結果のどちらとも言い難い。このように、様態副詞/結果副詞という従来の分類だけでは日本語の情態修飾関係の多種多様な現象を理解することができない。この問題に対して、研究代表者は[±結果相修飾][±モノのサマ修飾][±項修飾]という3種類の素性による分類法を提案してきた(井本亮2003)。この3種類の素性を交差させることによって分類項目が精確になり、様態副詞/結果副詞の対立では不可能だった現象の分類や修飾関係の論理的予測が可能になった。

しかしこの素性分析でも課題が残されている。たとえば「地面を丸く掘る」は「掘って地面が丸くなる」という意味ではない。丸くなるのは地面を掘った結果に生じたモノ(穴など)である。結果物が生じるという意味は「地面を掘る」にはないので、これは副詞的修飾によって新たに生じた動詞の意味である。

このような解釈は副詞の意味と動詞の意味が整合しないことが原因で、整合的に解釈するために強制的に動詞などの意味を変化させることで生じる。これを「意味強制」と呼ぶ。意味強制は本来不整合である副詞的修飾関係を整合的に成立させようとする意味計算のメカニズムである。このような意味的強制をもたらす修飾関係(強制的修飾)は記述的にも理論的にも体系的な研究はまだ行われていない。素性分析による交差分類で分類上の精度は高まるが、副詞的修飾の真に精

確な記述とは、強制的修飾と通常の修飾関係を区別し、さらに強制的修飾が起こる諸条件をも明らかにしたものでなければならない。

2. 研究の目的

副詞と動詞で構成される副詞的修飾の先行研究は静的な語法記述に偏っている。特に副詞との意味的不整合から生じる「意味強制」の現象については体系的な研究は行われていない。本研究は動詞と副詞の意味的相互作用に関する現象を観察し、副詞的修飾における意味強制の現象を記述することによって、精確な修飾関係の記述と分類を提示し、日本語学・日本語教育文法などに資する言語データを提供するとともに、意味解釈のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

第一に、素性分析によって、副詞的修飾関係の分類を進める。これで様態副詞/結果副詞の分類よりも正確で緻密な修飾関係の整理が行える。その整理・分類の結果をまず明らかにする。

第二に、その分類体系について、強制的修飾が生じる修飾関係を調査し、強制的修飾の事例間の共通性・相違点を明らかにする。同時に、強制的修飾の現象について理論的観点から考察し、動詞意味論や生成語彙論における理論的含意を検討する。

本研究の特徴は従来の語法的な副詞研究の射程を超えた動詞述語文の事象解釈全体を捉えようとする点にある。副詞の用法とは述語動詞句との意味的整合によって導かれる「関係の解釈」である。そのなかでも強制的修飾に注目することで、一見曖昧に見える副詞の精確な記述が可能になるだけでなく、動詞述語文の意味も動詞の語彙レベルと意味的相互作用による事象レベルに解体される。本研究の成果は動詞の精確な意味記述にも貢献する。

4. 研究成果

本研究では、特に副詞的修飾関係によって生じる意味強制の現象を記述し、動詞述語文における意味計算のメカニズムを明らかにしようとするものである。当初の計画通り、実証的研究および理論的基礎研究を行い、以下の研究成果を得た。

研究論文「日本語結果構文における限定と強制」では、日本語のいわゆる結果構文をモノのサマに関わる副詞的修飾関係と位置づけることの有効性を論じた。本論文のアプローチは英語のような個別の構文と位置づけるよりも、他のモノのサマの副詞的修飾関係との異同を考えることによって日本語の連用成分の包括的理解につながる。また、「腕が赤く腫れる」のような標準的な分析では説明できない事例を取り上げ、副詞的修飾にみられる意味強制的メカニズムを導入することによって説明されることを論じた。この現象は日本語が弱い結果構文（動詞の語彙的意味に含意される状態変化の特定を行う結果構文）しか許さないという標準的な分類だけでは十全な説明ができないことを強く示唆しており、このような枠組みにとらわれない分析が求められる。また、日本語結果構文は二次叙述関係であるとする標準的な立場についても、日本語の連用修飾の個別性に鑑みて、さらなる現象の精査・記述が必要であることを示唆している。日本語の結果構文を二次叙述関係として一義的に規定してしまうことによって、情態修飾関係の広汎な体系的記述の見通しを妨げる可能性もあるのである。

研究論文「形容詞連用形による副詞的修飾関係 モノのサマの修飾関係を中心に」では副詞的修飾関係における意味範疇の整合性について論じた。副詞的修飾は連用的構文関係であるが、意味的にはモノ・コト・ウゴキという意味範疇とアスペクト的性質が交差的に関わっているのである。したがって、このような構文的性質を素性の束としてとらえ、修飾関係の分類の各タイプの相互関係が可視的に捉えられるような体系を考えていく必要がある。

口頭発表「概念構造と他領域との接点 事象投射理論の可能性 : 語用論との接点: 期待値を表示する構造 「Vすぎる」の事象投射構造」では、事象投射理論というアスペクト計算理論の有効性について、「Vすぎる」の事例を論じ、[過剰]の含意が語用論的期待値として事象構造に組み込まれているという分析を提案した。これによって、程度概念を概念意味論で無理なく取り扱うことができるようになった。これまでの概念意味論の枠組みでの分析では、程度概念および数量概念の計算、さらにはアスペクト計算もできなかった。これに対するアンチテーゼとして提出されてきたのがスケール構造理論からの研究だったが、これは動的事象の限界性をスケール概念に還元しようとするものである。しかし、程度概念と事象の限界性は連動性が

あるとはいえ、たとえばincremental themeとmeasuring-outの現象など、程度概念に一元的に還元するとかえって説明力が低下することもある。本発表の提案はこうした両者の問題点を総合的に解消していくものである。それは事象投射理論という計算モデルの有効性を裏づけるものであると同時に、スケールが文脈依存的・語用論的であるという程度概念の本質を捉えたものであり、「Vすぎる」の解釈類型をすべて無理なく説明することができるという現象説明力にとどまらない強い理論的含意を持つことになった。

口頭発表「「赤く」はなぜ「塗る」を修飾できるのか試論」では、生態心理学的知見を副詞的修飾における意味強制的現象に援用し、概念意味論の3部門並列モデルにおける概念構造と空間構造とのインターフェースに関わる理論的含意を指摘した。すなわち、副詞的修飾におけるモノのサマ修飾は生態心理学的におけるアフォーダンスを基盤とすることによって成立している可能性があるというものである。これまでJackendoff(2002)などが牽引してきた概念意味論の3部門並立モデルでは、統語 意味、あるいは統語 音韻のインターフェースが論点になることはあったが、意味部門のインターフェースである空間構造(Spatial Structure)、さらにはさらに運動・知覚部門とのインターフェースについてはまったくおざりにされてきた。本発表の持つ理論的含意は意味強制的局面において、空間構造や知覚部門との相互参照を行っていること、さらには両部門の言語の意味処理における意味強制発動プロセスとの関係を示唆している可能性があり、今後さらに考察を進めていくべき問題を提示している。

本研究が明らかにしたように、副詞は単なる従属的・副次的な随意要素ではなく、動詞文の意味解釈を更新させる生成的意味作用を持つ構文関係である。従来の固定的な語法研究や語彙の意味分析では、このような副詞的修飾のダイナミズムはほとんど注目されてこなかったが、動詞述語文の語彙意味論的研究を深化させる重要な現象であると考えられる。今後は、このような視座から関連する言語現象の記述・理論的説明に取り組んでいく必要がある。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

井本亮「形容詞連用形による副詞的修飾

関係 モノのサマの修飾関係を中心に」
『国文学 解釈と鑑賞』(査読無)74巻7
号、2009年、52-60
井本亮・福盛貴弘「意味範疇の文法性判
断への関与について 事象関連電位を用
いた実験言語学的研究」『実験音声学・
言語学研究』(査読有)1号、2009年、39-52
[http://www.lingua.tsukuba.ac.jp/~ipp
an/JELS/2009/2009_Imoto_Fukumori.pdf](http://www.lingua.tsukuba.ac.jp/~ipp
an/JELS/2009/2009_Imoto_Fukumori.pdf)

〔学会発表〕(計3件)

井本亮「「赤く」はなぜ「塗る」を修飾で
きるのか試論」第7回現代日本語文法研
究会、2009年11月14日、筑波大学
井本亮「概念構造と他領域との接点 事
象投射理論の可能性：語用論との接点：
期待値を表示する構造 「Vすぎる」の
事象投射構造」日本言語学会第138回
大会、2009年6月20日、神田外語大学
井本亮「Semantic Coercion in Japanese
Resultatives」第6回現代日本語文法研
究会、2008年10月26日、筑波大学

〔図書〕(計2件)

小野尚之(共著)『結果構文のタイポロジ
ー』ひつじ書房、2009年、267-313(第7
章「日本語結果構文における限定と強
制」)
岩本遠億(共著)『事象アスペクト論』開
拓社、2008年、323-368(第5章「限界
点を超える 「Vすぎる」の意味計算
と解釈コスト」)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井本 亮 (IMOTO Ryo)
福島大学・経済経営学類・准教授
研究者番号：20361280

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：